

外国ルーツ市民ピア・サポーターへの インタビュー調査

An Interview Survey of Peer Supporters with Foreign Backgrounds

志 村 恵

公立小松大学

Abstract: People from diverse cultural backgrounds are working, studying, and living in Japanese society under various residency statuses. The number of foreign citizens has increased almost every year, except during the COVID-19 pandemic period. By the end of 2024, the number of foreign citizens reached a record high of 3,768,977, accounting for approximately 3.0% of the total population.

We conducted interviews with supporters who assist newcomer citizens with foreign backgrounds at local international exchange associations and NPOs supporting citizens with foreign backgrounds. These supporters are themselves citizens with foreign backgrounds who have lived in Japanese society for a certain period and are, so to speak, established members of Japanese society. The interviews aim to depict aspects of the reality and significance of peer support activities conducted by oldcomer citizens with foreign backgrounds for new commers.

This interview survey offered glimpses of these volunteers who, despite facing various difficulties and problems, continue their support activities for newcomer compatriots. Their support covers an extremely wide range of matters, including those related to daily life and health. The importance of specialized knowledge and connecting individuals to appropriate support networks was highlighted. On the other hand, peer support activities also serve as a source of joy and purpose for the supporters themselves. It seems necessary to further organize and institutionalize peer support activities (through training programs, etc.) to ensure their sustainability.

Keywords: Peer Support, Citizens with Foreign Backgrounds, International Exchange Association, NPO

0. 外国ルーツ市民のおかれた状況とピア・サポート（はじめに代えて）

2024年6月21日、「出入国管理及び難民認定法及び外国人の技能実習の適正な実施及び技能実習生の保護に関する法律の一部を改正する法律」が公布され、同日から起算して3年以内の政令

で定める日に、新たに「育成就労制度」が施行されることになったが¹⁾、日本において生活する外国人数は、1990年の入管法の改正によって3世までの日系の人たちに「定住者」の在留資格を付与して以来、1993年の「外国人研修・技能実習制度」、2018年の「特定技能」の創設等を経て、コロナ禍の期間を除いて、毎年のように増加してきた。すなわち、2024年末には、外国人数が過去最高の3,768,977人に達し、これは総人口の約3.0%である（表1参照）。これを10年前の2015年と比べると、人数で1,536,788人増、人口比で1.2%増である。また、外国人の国籍は、2024年末においては、1位の中国が873,286人で23.2%、2位のベトナムが634,361人で12.3%、3位の韓国が409,238人で10.9%、4位のフィリピンが341,518人で9.1%、5位のネパールが233,043人で6.2%あった。これを在留資格別に見ると、1位の永住者が918,116人で24.4%、2位の技能実習が456,595人で12.1%、3位の技術・人文知識・国際業務が418,706人で11.1%、4位の留学が402,134人で10.7%、5位の家族滞在が305,598人で8.1%、さらに6位の特定技能が284,466人で7.5%、7位の定住者が223,411人で5.9%、8位の日本人の配偶者等が150,896人で4.0%であった。

こうした統計からは、多様な文化背景を持つ人たちが、多様な在留資格のもとで中長期滞在しつつ、日本社会において働き、学び、生活していることがわかる。外国人の増加については現在さまざまな観点からの議論があるが、増加の背景には日本社会の少子高齢化と世界のグローバル化があり、日本の社会はこれらの外国人の支えなしには生産活動や社会福祉等を維持できない。さらにはこれらの外国人は日本社会に定住する傾向にある。

表1. 在留外国人の数と人口比の推移

年度	2015年	2016年	2017年	2018年	2019年	2020年	2021年	2022年	2023年	2024年
外国人数	2,232,189	2,382,822	2,561,848	2,731,093	2,933,137	2,887,116	2,760,635	3,075,213	3,410,992	3,768,977
人口比	1.8%	1.9%	2.0%	2.2%	2.3%	2.3%	2.2%	2.5%	2.7%	3.0%

(総務省統計局および出入国在留管理庁の資料から筆者作成)²⁾

一方、ピア・サポート（peer support）におけるピア（peer）は、語源的にはペア（pair）と同根で、ラテン語の pār（同じような、等しい）から来ており³⁾、「仲間」等を表す。したがって、ピア・サポートとは、一般的には、同じ立場の人、当事者同士による支援活動を表す。また、日本ピア・サポート学会の定義によると、ピア・サポートとは、「仲間や同輩が相互に支え合い課題解決する活動」で「専門家によるサポートとは違い、仲間としてよりよくサポートする“仲間力”に基づいたもの」⁴⁾である。

ピア・サポート活動は、世界中の支援活動においてさまざまなかたちで実践されているが、その研究・実践は、移民を多く受け入れて多文化共生社会を作ろうとした1970年代のカナダから始まり、その後世界中に広がったとされている⁵⁾。日本も例外ではなく、さまざまな依存症や障が

いを持つ人たち、難病の人たち等による活動、教育現場における活動などが各地でなされている。

こうした状況をもとに、本研究では、すでに日本社会において一定期間生活し、いわば日本社会に定着しているオールドカマーの外国ルーツ市民が、地域の国際交流協会や民間団体等の枠組みにおいて行っている、ニューカマーの外国ルーツ市民を対象としたサポート活動を広義のピア・サポート活動と位置づけ、そうした活動を行っているサポーターに対してのインタビュー調査を行い、外国ルーツ市民による外国ルーツ市民に対するピア・サポート活動の実態の一部とその意義を描出するものである。

1. 調査の目的と方法

【目的】

本研究は、前述のように、外国ルーツ市民によるピア・サポート活動の実態の一部とその意義をピア・サポーターに対するインタビュー調査から描出し、これを多文化共生社会の構築につなげようとするものである。

【方法】

本研究では、X県のA市、B市、C市において機縁法で依頼した5名のサポーターに、日本語で、表2に示すインタビュー・ガイドに基づいて、半構造化インタビューを日本語で行った。インタビューは、持参したICレコーダーに録音し、論者の手によって文字起こしを行い、その内容を分析した。すなわち、語られたテキストをサブ・カテゴリーおよびカテゴリーに整理し、それをもとに論点をまとめた。なお、インタビューを始める前に本研究の目的や方法、協力しない場合でも何ら不利益を被らないこと、いつでも協力を取りやめることができることなどについて十分な説明を行い、同意を得た。⁶⁾

表2. インタビュー・ガイド

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none">1) あなたはどのようにしてピア・サポートをしようと思いましたか？2) ピア・サポーターをやってよかったことは何ですか？3) ピア・サポーターをやってよくなかったことは何ですか？4) 今後も活動を続けたいですか？理由も。5) この活動をほかの方に勧めたいですか？理由も。6) ピア・サポーターに必要なことは何だと思えますか？7) あなたが受けた研修があれば、その内容はどのようなものでしたか？8) 今後の研修に必要なもの（研修内容、研修回数等）は何でしょうか？ |
|---|

2. 調査結果

表3で示すように、今回依頼したインタビューイは5名であった。全員女性で、国籍はインドネシア1名、ブラジル1名、ベトナム2名、中国1名、合計4か国であった。また、全員既婚者

で、その家族構成は一人を除いて夫と子どもであり、在日歴は短い人で8年、長い人で32年である。ピア・サポート活動をする上での立場は、NPOの役員・職員、国際交流協会の職員・会員であった。また、ピア・サポート活動を行う前にプログラム化された研修を受けたサポーターはいなかった。

表3. インタビュー属性（インタビューの実施順）

	国籍	性別	居住地	立場	渡日歴	家族	時間
1	インドネシア	女性	A市	NPO役員	24年	夫と子ども	45分
2	ブラジル	女性	B市	協会職員	32年	夫と子ども	44分
3	ベトナム	女性	C市	協会職員	20年	夫と子ども	32分
4	ベトナム	女性	C市	協会会員	8年	夫	34分
5	中国	女性	A市	NPO職員	32年	夫と子ども	30分

本報告では、インタビュー内容を、4つのカテゴリー、すなわち「活動の動機・きっかけ」、「活動への困難感」、「活動の充実感・喜び」、「活動継続の気持ちとその動機」と、「サポート・相談内容」および「サポーターに必要なもの」の全部で6つに分け、以下紹介する。

サポーターによるサポート活動の内容は、表4に示す通り、実に多岐にわたり、病院の付き添い・通訳から就学に関するサポート（進路指導、いじめ問題含む）、税務関係、アルバイトや就労・失業に関すること、住居探し、自動車免許関係、市役所等での各種申請補助、DV問題など日常生活のほぼすべてと言ってもよいほどの広範囲に及んでいた。

表4. サポートおよび相談内容

病院（産科含む）の付き添い・通訳、保育園・幼稚園の手続き援助、学校（特別支援学校含む）への付き添い・通訳（進路指導、いじめ問題含む）、児童相談所への付き添い・通訳（DV問題含む）、確定申告の援助、アルバイトの紹介、保険一時金の申請援助、住居探しや不動産業者での通訳、保健所・市役所への付き添い・通訳（各種届、助成金申請等）、年金・保険関係、労働案件（ハラスメント含む）や警察関係（免許切り替え含む）、DV等は専門につなぐ、支援団体とのつなぎ

一方、そうした活動をそもそも始めた動機やきっかけに関しては（カテゴリー1）、3つのサブ・カテゴリーに分類できた。すなわち、「恩返し（恩送り）」「仕事の紹介」「自然に活動」である。「恩返し（恩送り）」はさまざまなサポート活動の動機としてよく挙がるものであるが、サポーター自身が来日した当初、日本における新しい生活において困ったり、悩んだことが多々あり、そうした時にさまざまな人に助けってもらったので、今度は自分が新しく来日した人を助けてあげたいというものである。また、失業中にJICAのプログラムで雇用され、その後国際交流協会において相談員として採用されたケースもある一方で、いつの間にか気が付いたら自然にサポート活動を始めており、自分自身「何やったかって、覚えていない」ケースもあった。

表 5. カテゴリー 1 活動の動機・きっかけ

サブ・カテゴリー	実 際 の 語 り の 一 部
恩返し（恩送り）	あの私ね、日本来て、本当に新しい生活だから、いろいろ困っていることがあります。だから、その時は、いろんな人と助けてくれるから。だから、今ちょっと困っている人も助けたい気持ちで。だから、何か少しでもお役に立てばいいなど。
仕事	最初から、リーマンショックの時に、JICA の事業で、そのいろんな外国人なんかで首切られた時に、その通訳としてそれで入ったんですよ。（中略）JICA の契約が終わって、一応国際交流協会が声かけて、ちょっとそのまま相談員の仕事になったんです。
自然に活動	なんだろう、本当に、本当にやっているとなんだろうか。実は、自然、自然に。だから本当、何やったかって覚えてないですよ。

こうした多様な活動の中で、サポーターたちは困ったり、困惑感、不安感を覚えたりする場合も多い（カテゴリー 2 活動への困難感）。今回の調査では、これらの困難感は 3 つのサブ・カテゴリーに分類できた。すなわち、「疲労感・徒労感」、「不安感」、「セクハラ」である。自分の生活も大変な中、夜間にも電話がかかってきたりして、「でもさすがに正直言って、疲れてるときもあり」「辛いなど」感じるときもあるという。また、「ただ、問題あるときだけは来るって。で、その後、問題解決になったら、身辺がどうなるかっていう情報が入ってない場合は、え、何って感じなんですよね。やっぱり人間って、自分が苦しいときだけは、他の人を思い出して、うれしいときは何にも」と感謝のことばも事後報告すらないことを残念に思い、また徒労感を抱いている姿も見られた。さらに、前述のようにサポート・相談内容が極めて多様であるため、また多くの場合、健康、子どもの教育、仕事に関する内容等重要な内容であったりするため、「自分の責任になってしまいますから、すごく怖いです」と不安感を吐露したサポーターもいる。そして、特に異性間で生じやすい事項としてセクハラ問題も挙げられた。「ちょっといやらしいメール来たりとか、夜とか」と実際に被害にあったケースも語られた。

表 6. カテゴリー 2 活動への困難感

サブ・カテゴリー	実 際 の 語 り の 一 部
疲労感・徒労感	毎回もうほぼ毎回はあるんですよ。でもさすがに正直言って、疲れてるときもあります。はい、ちょっと辛いなどというときもあります。
	私がすごいことをやってるな、（中略）言われてなくてもいいんですけど、ただ、問題あるときだけは来るって。で、その後、問題解決になったら、身辺がどうなるかっていう情報が入ってない場合は、え、何って感じなんですよね。やっぱり人間って、自分が苦しいときだけは、他の人を思い出して、うれしいときは何にも。
不安感	一番怖いです。だって伝え、正確に伝えられない場合は、自分の責任になってしまいますから、すごく怖いです。
セクハラ	正直言って、ありました。ちょっと男性の方から、ああ、そういうのはありました。ちょっといやらしいメール来たりとか、夜とか。そっちがありましたね。

しかし、逆に、サポート活動に充実感や喜びを感じる局面もサポーター全員において見受けられた（カテゴリー 3 活動の充実感・喜び）。以下、その「充実感・喜び」を「寄り添うことがで

きる」、「助けられる」、「役立てる」、「自分にもメリット」の4つのサブ・カテゴリーに分けて示したい。

「自分が同じ立場だったら」あるいは「パニックになって」いても、となりに「誰かいたら嬉しいだろう」と寄り添うことができる、あるいは専門職や団体につなげることで適切に人を助けたり、「その問題がよくなればそれでよかった、私」と問題解決できたりすると充実感や喜びを感じることができるという。また、「感謝とか言ってくださったんですけど。なんか人に役に立つという気持ちが一番嬉しかった」と、役立ち感を得られることは、感謝をされることよりもさらに大きな喜びであろう。そして、サポート活動は、他者の利益だけではなく、サポーター自身のメリットにもなる場合もあると指摘された。すなわち、「自分の不安ことがたくさんあります。あると思う。だからこの機会をしてすごく勉強になりました」と、自分自身が持っている問題の解決に活動を通じて得た情報などが役立ったこともあったという。このように、ピア・サポート活動はサポーター自身のエンパワーメントになっており、さらにはそのことが、後述の活動継続の意思ともつながっていると思われる。

表7. カテゴリー3 活動の充実感・喜び

サブ・カテゴリー	実 際 の 語 り の 一 部
寄り添うことができる	もし自分が同じ立場だったらとか、いつも考えますね。自分がパニックになってとか、自分がこうだったら、その時1人だったら、でも誰かいたら嬉しいだろうなんていうことで。
助けられる	最初の時はやっぱりこの人を助けたいと思っても、自分の1人は何もできないから、その時はやっぱりどこかの団体、例えばこちらはあの国際交流の団体で相談などを、相談したり、それを受けたり、それからこういうケースはどこ行ったらいいか教えたり、それは大変助かると思います。 よかったことは、その上、なんだろうね。よかったことは、その問題がよくなればそれでよかった、私。
役立てる	結構皆さん、いろいろ感謝とか言ってくださったんですけど。なんか人に役に立つという気持ちが一番嬉しかったんですね。
自分にもメリット	自分の不安ことがたくさんあります。あると思う。だからこの機会をしてすごく勉強になりました。

今回の調査で示されたように、外国ルーツ市民サポーターは、いろいろな困難感や困惑感、不安感を抱えながらも、サポート活動を喜びと充実感を持って行っており、インタビュー全員が今後もサポート活動を継続したいと考えているようである（カテゴリー4 活動継続の気持ちとその動機）。その活動継続の気持ち・動機は、主に「助けたい」、「安心させたい」という2つのサブ・カテゴリーに分けられる。オールドカマーは、すでに日本社会においてさまざまな経験をしていて、一定以上の知識と情報を有し、ニューカマーを実務的に助けることのできる立場にいるが、そうした中、「助けるのは当たり前」と語るそのことばには、活動継続への強い思いが伺える。また、「みんな安心して。仕事も上手に、勉強も上手にできるとしたら。だから私この気持

ちは、ずっとしたいです」とニューカマーが気持ちの上でも安心して仕事や勉学に励めるように思いやる同胞愛のようなものが感じられた。

表 8. カテゴリー 4 活動継続の気持ちとその動機

サブ・カテゴリー	実 際 の 語 り の 一 部
助けたい	続けたいと思います。ただし、あのそれは当たり前と思っていますから。だって、助けられる立場、助けるのは当たり前じゃない？
安心させたい	続けたいです。理由は最近、(中略)留学生は増えています。だから、みんな、少しでも日本語をわかるように、文化とか分かると、生活は安心すると思っています。みんな安心して。仕事も上手に、勉強も上手にできるとしたら。だから私この気持ちは、ずっとしたいです。

しかし、一方で、サポート活動を継続する上で、さらに自分たちに必要なものがあることを意識しているサポーターもいた。ここでは、その必要なことを以下の表9のように、「マインド」「スキル」、「制度」という3つに分類してまとめる。まず、必要な「マインド」として挙げられたのは、日本の社会・文化をも含めた「多文化・異文化理解」への気持ちと「やさしさ」であった。また、必要な「スキル」としては、さらに高度な「日本語能力」、社会資源や教育制度などのさまざまな分野に関する「専門的知識」、そして、必要な「行政や団体、専門職と連携する力」が挙げられた。サポーターがすべての事項について必要な情報提供や援助を行うことはできないし、DVや労働問題など専門的資格や権限なしには対応できないケースもあるので、この「連携する力」は極めて重要なスキルと言えよう。さらに、サポーターが自信をもって活動に参画したり、あるいは被援助者や行政の信用を得たりするために、「研修・養成講座」が設定・実施され、さらには一定の研修を受けた後に「資格付与」がなされることも重要なことである。

表 9. 今後の活動に必要な事項 (サポーターにとって)

マインド	多文化・異文化理解、やさしさ
スキル	日本語力、専門的知識、行政や団体、専門職と連携する力
制度	研修・養成講座、資格付与

3. まとめ

今回のインタビュー調査においては、さまざまな困難感や当惑感を持ちながら、同胞のためにサポート活動をしているオールドカマーの姿が垣間見られた。相談・サポート内容は事前に想像した以上に多様であり、中には、生命や健康、人生に関わる事項もあり、専門的知識と連携先への「つなぎ」の重要性が指摘された。一方で、これらの外国ルーツ市民によるピア・サポート活動は、サポーター自身の喜び、生きがいになっている面もあると言える。

今回のインタビューの立場は、国際交流協会の職員・会員とNPO法人の役員・会員であっ

たが、サポート活動を続けたいという気持ちを生かすためにも、サポート活動をさらに組織化・制度化し（研修プログラムや委託事業化など）、持続可能性（サポーターの確保を含む）を担保する必要があると思われる。

なお、今回の調査ではインタビューを日本語で行ったため、日本語能力の差がインタビュー内容に影響した可能性もあるので、今後は母語での調査を行いたい。また、サンプル数を増やし、サポート活動を継続しなかった人へのインタビュー調査をも行う必要がある。

【注】

- 1) <https://www.moj.go.jp/isa/content/001437136.pdf>
- 2) 総人口はその年の10月1日現在の数値。外国人数はその年の年末の数値。
<https://www.moj.go.jp/isa/content/001434755.pdf>
<https://www.stat.go.jp/data/jinsui/2.html#annual>
- 3) 日本ピア・サポート学会 HP : <http://www.peer-s.jp/idea.html>
- 4) 『英語語源辞典』（新装版）研究社、1997年、1022頁および1044頁。
- 5) 春日井敏之他（編著）『大学でのピア・サポート入門』ほんの森出版、2020年、6頁。
- 6) 本調査は、公立小松大学研究倫理審査委員会の倫理審査を受けている（医倫2402-2）。

【謝辞】

インタビューに応じてくださった5名の方々に心より感謝申し上げます。また、本研究は科学研究費補助金基盤研究（C）「地域共生社会を目指す、外国人市民のためのピアサポート・プログラムの開発・試行」（課題番号23K01901）による。